<table>
<thead>
<tr>
<th>項目</th>
<th>内容</th>
</tr>
</thead>
<tbody>
<tr>
<td>タイトル</td>
<td>「学校基本調査」における専修学校関連データの推移に関する一考察 北海道の事例</td>
</tr>
<tr>
<td>著者</td>
<td>上原 慎一</td>
</tr>
<tr>
<td>キーワード</td>
<td>北海道大学大学院教育学研究院紀要</td>
</tr>
<tr>
<td>キーワード</td>
<td>北海道大学大学院教育学研究院紀要</td>
</tr>
<tr>
<td>キーワード</td>
<td>北海道大学大学院教育学研究院紀要</td>
</tr>
<tr>
<td>キーワード</td>
<td>北海道大学大学院教育学研究院紀要</td>
</tr>
<tr>
<td>キーワード</td>
<td>北海道大学大学院教育学研究院紀要</td>
</tr>
</tbody>
</table>

Hokkaido University Collection of Scholarly and Academic Papers : HUSCAP
「学校基本調査」における
専修学校関連データの推移に関する一考察
—北海道の事例—

上原 慎一*

【目次】
はじめに
  1. 卒業後の進路状況
     (1) 中学校卒業後
     (2) 高等学校卒業後
  2. 専修学校の設置状況と進学者の地域別特徴
     (1) 設置状況
     (2) 進学者・生徒の特徴
     (3) 進路・進路指導への影響
  まとめにかえて
【キーワード】教育訓練機関への進学, 専修学校等への進学, 専修学校の設置状況,
ローカルトラック, 地域間格差

はじめに

小論の目的は、北海道を事例に「学校基本調査」における（高校・大学）進学、就職以外の
進路データ、および専修学校関係のデータの数的変動等から地域における進路の多様性を分析
することにある。周知の通り、1975年の専修学校制度の整備以来、進路関連データの括りは
「進学」、「就職」、「無業」、「その他」に加え「教育・訓練機関入学者」（1978～83年）、「教育訓
練機関等入学者」（1984～93年）、「専修学校等進（入）学者」（1994～95年）、そして専修学校
の専門課程が独立カテゴリーとなった1996年からは「専修学校（専門課程）進学者」、「専修学
校（一般課程）等入学者」（1996年から現在まで）と変化している。従来の進学や就職の動向
に関わる研究や若年雇用問題に関する研究はもっぱら前者を対象にその歴史的傾向を把握して
きた。また、専門学校に関する研究も狭義の専門課程に関する項目のみを取り上げることが
多かった。小論は「一般課程等」に関する項目をも含めながら、その地域的・歴史的変動を
確認する。その意義・目的は以下の点にある。

第一は、なによりもそれぞれの地域における専修学校への進学の地域的特徴が長期的に把握
できることにある。具体的にはそれぞれの地域における中卒・高卒後の進学・就職状況を確認

* 北海道大学大学院教育学研究院教授
DOI：10.14943/b.edu.128.41
した上で専修学校の学校数や学科数、生徒数の変動等を検討する。

ここで地域別というのは、北海道内の14の地域ブロック（かつては「支庁」、2010年から「振興局」）ごとの特徴という意味である。北海道の場合はこの14のブロックごとに学校基本調査のデータが整備されている。また、14の地域ブロックも以下の三つに分類できる。第一は圧倒的に学校数が多い地域であり、第二は振興局の構想段階で「総合振興局」とされ、第三はそれ以外の地域である。便宜的に第二の分類を地方都市圏、第三の分類を地方圏とする。

第二は、「多様な文脈での「多様な学校」進路について長期的に考察できることである。ここであえて長期的というのは、特に専門学校研究に顕著であるが、定義が厳密である専門課程進学者に限定したデータにこだわる限り、その傾向は90年代中葉以降しか把握できない。あえてそれ以外の各種学校等を含むカテゴリーを用いることによって70年代後半からの進学や就職以外の進路の傾向が確認できる。また、この多様性は専修学校のデータと付き合わすることによって、一定程度補正可能である。

第三は、「多様な学校」位置づける可能性について検討することが可能となることである。専門学校については歴史的進展から制度としての専門学校の位置付けに関するものが主流であったが、近年は専門学校での学び、取得できる資格、卒業生のキャリアの考察に関する研究が増えてきている。特に後者の研究は専門学校の現代的役割や機能を明らかにする中で、職業教育機関としての専門学校の教育学的意義の解明に多大なる貢献をなしている。しかし、これらの研究は一方で専門学校の存立条件のマクロな状況と、事例としての大都市部の専門学校での学びや専門学校生の実態が無媒介に接続されており、具体的な専修学校を取り巻く諸事情と進学の動向との関連を結びつけて理解することが難しい。

さらに多様な進路のあり方は、たとえば多様な設置主体による職業訓練施設がある。この職業訓練施設は「養成工」を受け入れる「学校」として歴史的にも現代においても一定の位置を占めてきた。専門高校での職業教育以外の教育や職業教育機関での教育や訓練の幅やその社会的性についてには、いまだ未解明な部分が多い。

更に言うなら、この分析を通じて「多様な学校」での学び、資格を取得し、働きかける若者の地域移動あるいはローカルなトラッキングの構造の解明という意義も有している。

1. 卒業後の進路状況

（1）中学校卒業後

全国的に高校進学率は70年代中葉には90%を超えたが、北海道の場合、70年代後半にずれ込む。北海道では教育訓練機関入学者が5%以上おり、無視できないウェイトで存在していた。しかし、80年代前半からは高校進学率は全国とはほぼ同じ比率となるが、教育訓練機関への進学率は全国的には激減傾向が継続する中で徐々にネグリジェブルになっていく（1%未満）のに対して、北海道の場合は急激に減少していった。すなわち、全国では20年かけて約3％から1％未満に減少したのに対し、北海道では1978年から15年足らずで5％から1％未満になるのである。これは、公共職業訓練校の再編が大きな影響を与えているものと見るのが
妥当であろう。すなわち，政策として定員を充足することが困難となった高等課程（多くは中卒の1年課程）を減少させ，全体として高卒2年課程を設置する流れの中で地方都市の高等課程が急速に減少したのである。

地方ごとに詳しく見ていくと，胆振，日高，桧山，宗谷，網走，釧路，根室地方で全道平均を上回る比率を示していたが，90年代後半にはいずれも1%を下回ることとなった。胆振地方のみが独自の動向を示しているが，これは公共職業訓練校の高等課程が存続していることと准看護師養成の高等課程が一定数存続しているだけではなく，近年新たに設置されたことが大きく影響している。

<table>
<thead>
<tr>
<th>年度</th>
<th>76年</th>
<th>78年</th>
<th>80年</th>
<th>82年</th>
<th>84年</th>
<th>86年</th>
<th>88年</th>
<th>90年</th>
<th>92年</th>
<th>94年</th>
<th>96年</th>
<th>98年</th>
</tr>
</thead>
<tbody>
<tr>
<td>合計</td>
<td>92.6</td>
<td>93.5</td>
<td>94.2</td>
<td>94.1</td>
<td>94.2</td>
<td>94.5</td>
<td>95.1</td>
<td>95.9</td>
<td>96.5</td>
<td>96.8</td>
<td>97.0</td>
<td>97.8</td>
</tr>
<tr>
<td>合計</td>
<td>3.1</td>
<td>2.8</td>
<td>2.5</td>
<td>2.5</td>
<td>2.3</td>
<td>2.4</td>
<td>2.4</td>
<td>2.0</td>
<td>1.8</td>
<td>1.2</td>
<td>1.1</td>
<td>0.9</td>
</tr>
<tr>
<td>合計</td>
<td>86.2</td>
<td>90.2</td>
<td>92.6</td>
<td>93.1</td>
<td>93.5</td>
<td>94.6</td>
<td>95.6</td>
<td>96.0</td>
<td>96.4</td>
<td>96.8</td>
<td>97.3</td>
<td>97.5</td>
</tr>
<tr>
<td>合計</td>
<td>5.8</td>
<td>5.1</td>
<td>3.2</td>
<td>2.8</td>
<td>2.3</td>
<td>1.9</td>
<td>1.5</td>
<td>1.1</td>
<td>0.8</td>
<td>0.7</td>
<td>0.6</td>
<td>0.5</td>
</tr>
<tr>
<td>合計</td>
<td>93.9</td>
<td>94.8</td>
<td>94.9</td>
<td>94.1</td>
<td>94.6</td>
<td>95.8</td>
<td>96.1</td>
<td>96.2</td>
<td>96.6</td>
<td>97.0</td>
<td>97.1</td>
<td>96.8</td>
</tr>
<tr>
<td>合計</td>
<td>2.5</td>
<td>2.4</td>
<td>1.8</td>
<td>1.5</td>
<td>1.0</td>
<td>0.8</td>
<td>0.7</td>
<td>0.7</td>
<td>0.6</td>
<td>0.5</td>
<td>0.4</td>
<td>0.3</td>
</tr>
</tbody>
</table>

出所）『学校基本調査』各年版。北海道独自集計分は北海道総合政策部情報統計局統計課作成。なお，表3及び表8以外はすべて出所は同じであるため，出所を逐一示さない。
<table>
<thead>
<tr>
<th>年度</th>
<th>78</th>
<th>80</th>
<th>82</th>
<th>84</th>
<th>86</th>
<th>88</th>
<th>90</th>
<th>92</th>
<th>94</th>
<th>96</th>
<th>98</th>
<th>0</th>
<th>2</th>
<th>4</th>
<th>6</th>
<th>8</th>
<th>10</th>
<th>12</th>
<th>14</th>
</tr>
</thead>
<tbody>
<tr>
<td>全国</td>
<td>54.3</td>
<td>53.5</td>
<td>53.8</td>
<td>53.4</td>
<td>53.6</td>
<td>53.9</td>
<td>54.1</td>
<td>54.3</td>
<td>54.6</td>
<td>54.9</td>
<td>55.2</td>
<td>55.5</td>
<td>55.8</td>
<td>56.1</td>
<td>56.4</td>
<td>56.7</td>
<td>57.0</td>
<td>57.3</td>
<td>57.6</td>
</tr>
<tr>
<td>黒部</td>
<td>53.9</td>
<td>53.6</td>
<td>53.3</td>
<td>53.0</td>
<td>52.7</td>
<td>52.4</td>
<td>52.1</td>
<td>51.8</td>
<td>51.5</td>
<td>51.2</td>
<td>50.9</td>
<td>50.6</td>
<td>50.3</td>
<td>50.0</td>
<td>49.7</td>
<td>49.4</td>
<td>49.1</td>
<td>48.8</td>
<td>48.5</td>
</tr>
<tr>
<td>風</td>
<td>31.1</td>
<td>30.8</td>
<td>30.6</td>
<td>30.3</td>
<td>30.0</td>
<td>29.7</td>
<td>29.4</td>
<td>29.1</td>
<td>28.8</td>
<td>28.5</td>
<td>28.2</td>
<td>27.9</td>
<td>27.6</td>
<td>27.3</td>
<td>27.0</td>
<td>26.7</td>
<td>26.4</td>
<td>26.0</td>
<td>25.6</td>
</tr>
<tr>
<td>空</td>
<td>32.4</td>
<td>32.0</td>
<td>31.7</td>
<td>31.4</td>
<td>31.1</td>
<td>30.8</td>
<td>30.5</td>
<td>30.2</td>
<td>29.9</td>
<td>29.6</td>
<td>29.3</td>
<td>29.0</td>
<td>28.7</td>
<td>28.4</td>
<td>28.1</td>
<td>27.8</td>
<td>27.5</td>
<td>27.2</td>
<td>26.9</td>
</tr>
<tr>
<td>福</td>
<td>50.5</td>
<td>49.9</td>
<td>49.3</td>
<td>48.7</td>
<td>48.1</td>
<td>47.5</td>
<td>47.0</td>
<td>46.5</td>
<td>46.0</td>
<td>45.5</td>
<td>45.0</td>
<td>44.5</td>
<td>44.0</td>
<td>43.5</td>
<td>43.0</td>
<td>42.5</td>
<td>42.0</td>
<td>41.5</td>
<td>41.0</td>
</tr>
<tr>
<td>田川</td>
<td>27.6</td>
<td>27.0</td>
<td>26.5</td>
<td>26.0</td>
<td>25.5</td>
<td>25.0</td>
<td>24.5</td>
<td>24.0</td>
<td>23.5</td>
<td>23.0</td>
<td>22.5</td>
<td>22.0</td>
<td>21.5</td>
<td>21.0</td>
<td>20.5</td>
<td>20.0</td>
<td>19.5</td>
<td>19.0</td>
<td>18.5</td>
</tr>
<tr>
<td>浅川</td>
<td>47.6</td>
<td>47.3</td>
<td>47.0</td>
<td>46.7</td>
<td>46.4</td>
<td>46.1</td>
<td>45.8</td>
<td>45.5</td>
<td>45.2</td>
<td>44.9</td>
<td>44.6</td>
<td>44.3</td>
<td>44.0</td>
<td>43.7</td>
<td>43.4</td>
<td>43.1</td>
<td>42.8</td>
<td>42.5</td>
<td>42.2</td>
</tr>
<tr>
<td>松山</td>
<td>53.7</td>
<td>53.4</td>
<td>53.1</td>
<td>52.8</td>
<td>52.5</td>
<td>52.2</td>
<td>51.9</td>
<td>51.7</td>
<td>51.5</td>
<td>51.3</td>
<td>51.1</td>
<td>50.9</td>
<td>50.7</td>
<td>50.5</td>
<td>50.3</td>
<td>50.1</td>
<td>49.9</td>
<td>49.7</td>
<td>49.5</td>
</tr>
<tr>
<td>五所川</td>
<td>47.3</td>
<td>47.0</td>
<td>46.7</td>
<td>46.4</td>
<td>46.1</td>
<td>45.8</td>
<td>45.5</td>
<td>45.2</td>
<td>44.9</td>
<td>44.6</td>
<td>44.3</td>
<td>44.0</td>
<td>43.7</td>
<td>43.4</td>
<td>43.1</td>
<td>42.8</td>
<td>42.5</td>
<td>42.2</td>
<td>41.9</td>
</tr>
<tr>
<td>日暮</td>
<td>60.5</td>
<td>60.2</td>
<td>59.9</td>
<td>59.6</td>
<td>59.3</td>
<td>59.0</td>
<td>58.7</td>
<td>58.4</td>
<td>58.1</td>
<td>57.8</td>
<td>57.5</td>
<td>57.2</td>
<td>56.9</td>
<td>56.6</td>
<td>56.3</td>
<td>56.0</td>
<td>55.7</td>
<td>55.4</td>
<td>55.1</td>
</tr>
<tr>
<td>甲府</td>
<td>53.5</td>
<td>53.2</td>
<td>52.9</td>
<td>52.6</td>
<td>52.3</td>
<td>52.0</td>
<td>51.7</td>
<td>51.5</td>
<td>51.2</td>
<td>50.9</td>
<td>50.6</td>
<td>50.3</td>
<td>50.0</td>
<td>49.7</td>
<td>49.4</td>
<td>49.2</td>
<td>48.9</td>
<td>48.6</td>
<td>48.3</td>
</tr>
<tr>
<td>宇都宮</td>
<td>47.0</td>
<td>46.7</td>
<td>46.4</td>
<td>46.1</td>
<td>45.8</td>
<td>45.5</td>
<td>45.2</td>
<td>44.9</td>
<td>44.6</td>
<td>44.3</td>
<td>44.0</td>
<td>43.7</td>
<td>43.4</td>
<td>43.1</td>
<td>42.8</td>
<td>42.5</td>
<td>42.2</td>
<td>41.9</td>
<td>41.6</td>
</tr>
</tbody>
</table>

表2 大学進学率（1段目）、教育訓練機関進学率（2段目）、専門課程進学率（3段目）、就職率（4段目）（単位：%）
（2）高等学校卒業後

高卒後の進学率等の動きを表2で見ていくと、90年代前半までは大学進学率が北海道より全国が5％程度高く、就職がその逆、教育訓練機関入学率は両者同様の動きを示していた。大きく変わるのはそれ以降である。大学進学率は、全国で30%前後から急上昇し55%に迫る勢いで上昇しているが、北海道の場合、25％程度かなかなか上昇せず、90年代後半になってから30%を超え、2004年に40%台に上昇した。この間、全国との格差は拡大してきたことになる。就職率は双方とも5％程度の相違を維持しながら40%台から徐々に落ち込んでいくが90年代後半から両者共に急激に低下し始める。専修学校進学率は両者共に30％程度であったものが、大学進学率の上昇と共に全国で低下し始める。北海道ではこの間30%前後で安定的に推移している。すなわち90年前後で全国的には大学が拡張期に入り、就職率と教育訓練機関進学率の低下を補う形となるが、北海道の場合、進学率の相対的に低さを就職率と教育訓練機関進学率でカバーしていることになる。また、表には示していないが、専門課程への進学が独立データとなる1996年以降を比較しても、全国で20％をピークに減少し始め、近年では15％程度から長期的に減少する傾向を示しているのに対し、北海道では20％後を安定的に推移し、必ずしも減少傾向を示していない。以上を便宜的に時期区分するとすれば、90年代前半までは高卒就職主流期、90年代後半から2000年代前半までは専門学校拡張期、2000年代中葉移行を大学進学普及期とすることが出来るよう。

しかし、以上の動向は地方ごとに大きく異なる。まず、石狩圏は他の地域とまったく違う動きを見る。特徴的のは胆振、釧路以外での地方都市圏（上川、空知、智恵子、オホーツク、渡島、十勝）である。これらの地域はそれぞれ一定の規模の地方都市を有し、それぞれの都市には一定の専修学校や高等教育機関が存在している。それ以外の地方圏（日高、松山、留萌、宗谷、根室）の各地方は中核となる都市の規模も小さく、専修学校も数校以下である。高等教育機関も極めて少ない。各業種の時期ごとの比率を大まかに示すとしてあるが、90年代前半までは高卒就職主流期、90年代後半から2000年代前半までは専門学校拡張期、2000年代中葉移行を大学進学普及期とすることが出来るよう。

石狩圏は進学に限っては全国の動向と類を以って示している。それ以外の地方は近年に至るまでなかなか大学進学率が高まっていない。先に指摘したように先行して専門学校への進学が上昇し、いずれの地方でも30％程度の進学率を示していることが見て取れる。また、これらの地方では現在に至るまで一定の就職率を維持していることも強調されるべきである。
2. 専修学校の設置状況と進学者の地域別特徴

(1) 設置状況

表4は北海道全体の専修学校に関するデータである。設置主体別に見ると国立が大幅に減少し、公立、私立に増加するが近年にいたって当初の数と同程度に落ち着いている（公立15校→20校→16校、私立157校→190校→158校）。ただし、それぞれピークは異なり、私立で1990〜91年、公立で1996〜2003年である。学科数や生徒数の増減は、学校数とは別に動きを示しており、学科数のピークは2002年の505学科、生徒数のピークは2004年の39,482名である。学科数が増減しているのはもっぱら専門課程である。また生徒の男女比をみると当初かなり女子比率が高い（1980年で70.0％）が、生徒数の増減と共に男子もその比率を上げ2004年には40数％を占めるようになるが、その後の減少率も男子が高く2014年には40.5％に下がっている（16）。

表4 学校数等の推移・専修学校

<table>
<thead>
<tr>
<th>年度</th>
<th>数</th>
<th>国立</th>
<th>公立</th>
<th>私立</th>
<th>計</th>
<th>学科数</th>
<th>数</th>
<th>一般</th>
<th>高等</th>
<th>複合</th>
<th>専門</th>
<th>計</th>
<th>男</th>
<th>女</th>
<th>進学者数</th>
<th>一般</th>
<th>高等</th>
<th>複合</th>
<th>専門</th>
<th>専業者数</th>
</tr>
</thead>
<tbody>
<tr>
<td>1976</td>
<td>12</td>
<td>3</td>
<td>0</td>
<td>9</td>
<td>24</td>
<td>1</td>
<td>18</td>
<td>5</td>
<td>1</td>
<td>165</td>
<td>339</td>
<td>1</td>
<td>356</td>
<td>472</td>
<td>1</td>
<td>024</td>
<td>199</td>
<td>...</td>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>1980</td>
<td>595</td>
<td>371</td>
<td>284</td>
<td>107</td>
<td>222</td>
<td>37</td>
<td>28</td>
<td>17</td>
<td>17</td>
<td>695</td>
<td>248</td>
<td>1</td>
<td>356</td>
<td>339</td>
<td>1</td>
<td>356</td>
<td>472</td>
<td>1</td>
<td>024</td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>1985</td>
<td>256</td>
<td>180</td>
<td>76</td>
<td>99</td>
<td>151</td>
<td>41</td>
<td>33</td>
<td>13</td>
<td>12</td>
<td>575</td>
<td>214</td>
<td>1</td>
<td>356</td>
<td>339</td>
<td>1</td>
<td>356</td>
<td>472</td>
<td>1</td>
<td>024</td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>1990</td>
<td>151</td>
<td>142</td>
<td>99</td>
<td>18</td>
<td>150</td>
<td>13</td>
<td>11</td>
<td>10</td>
<td>11</td>
<td>517</td>
<td>176</td>
<td>1</td>
<td>356</td>
<td>339</td>
<td>1</td>
<td>356</td>
<td>472</td>
<td>1</td>
<td>024</td>
<td></td>
</tr>
</tbody>
</table>

を占めるようになるが、その後の減少率も男子が高く2014年には40.5％に下がっている（16）。
（2）進学者・生徒の特徴

以上をふまえて、専修学校数及び生徒数の地方別特徴を観察しよう（表5，表6）。先の進路の地域特性と同様な特徴を指摘しうる。すなわち、専修学校が集中する石狩圏、および10～20校程度存在している地方都市圏、ほぼ存在していない地方圏である。地方都市圏では80年代に若干増加するがその後の推移は学校数・学科数共に安定的に推移している（最も近年にいたって微増傾向が続いているが）。地方圏では数校存続しているか否かである。集積が著しく、かつ増減が激しいのはもっぱら石狩圏である。学校数で50％程度、学科数で2/3が石狩圏に集中している。その石狩圏では20年間で学科数が155から228にまで増加する。90年代もその上昇率は変わらず2002年には322を数えるようになる。その後、微増と微減を繰り返し現在に至っている。また、90年代前半までは学校数の増加と学科数の増加が比例していたが、90年代後半にいたって学校数はむしろ減少傾向にあるにもかかわらず学科数が増えている。すなわち1校あたりの学科数が増加しているのである。

表5 専修学校・学校数（上段）・学科数（下段）

| 年度 | 79 | 81 | 83 | 85 | 87 | 89 | 91 | 93 | 95 | 97 | 99 | 1 | 3 | 5 | 7 | 9 | 11 | 13 | 14 |
|------|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|
| 全道 | 139 | 172 | 179 | 194 | 199 | 206 | 214 | 208 | 203 | 204 | 205 | 197 | 191 | 184 | 184 | 185 | 180 | 179 | 175 |
| 石狩 | 364 | 422 | 428 | 436 | 448 | 482 | 456 | 439 | 426 | 461 | 483 | 487 | 489 | 485 | 492 | 483 | 442 | 426 | 403 |
| 地方都市圏 | 49 | 62 | 65 | 74 | 77 | 84 | 89 | 89 | 88 | 90 | 94 | 94 | 92 | 94 | 94 | 94 | 91 | 90 | 88 |
| 空知 | 148 | 171 | 181 | 184 | 201 | 228 | 234 | 240 | 233 | 258 | 280 | 301 | 314 | 316 | 326 | 320 | 287 | 291 | 274 |
| 上川 | 8 | 10 | 10 | 14 | 14 | 15 | 18 | 15 | 13 | 15 | 13 | 14 | 13 | 13 | 13 | 13 | 13 | 13 | 13 |
| 留萌 | 5 | 9 | 9 | 11 | 11 | 11 | 11 | 10 | 10 | 10 | 9 | 8 | 8 | 8 | 8 | 8 | 7 | 7 | 6 |
| 胆振 | 13 | 20 | 19 | 20 | 23 | 22 | 22 | 19 | 18 | 16 | 15 | 13 | 11 | 10 | 12 | 10 | 8 | 4 | 4 |
| 留萌 | 9 | 13 | 15 | 14 | 15 | 15 | 14 | 14 | 14 | 14 | 13 | 12 | 12 | 12 | 12 | 11 | 11 | 11 |
| 地方法人都市圏 | 28 | 25 | 36 | 38 | 38 | 41 | 33 | 30 | 28 | 30 | 27 | 26 | 27 | 25 | 27 | 26 | 24 | 24 | 22 |
| 留萌 | 9 | 13 | 13 | 14 | 14 | 15 | 15 | 14 | 15 | 13 | 13 | 12 | 11 | 10 | 10 | 10 | 10 |
| 留萌 | 57 | 18 | 18 | 18 | 19 | 20 | 18 | 18 | 19 | 21 | 21 | 21 | 19 | 21 | 18 | 17 | 14 | 12 |
| 上川 | 19 | 20 | 20 | 21 | 21 | 21 | 23 | 23 | 22 | 22 | 21 | 20 | 19 | 16 | 14 | 14 | 13 | 13 | 12 |
| 東川 | 46 | 50 | 49 | 49 | 51 | 42 | 42 | 42 | 42 | 50 | 50 | 32 | 39 | 38 | 38 | 31 | 29 | 28 | 24 |
| 留萌 | 17 | 19 | 20 | 21 | 20 | 20 | 17 | 15 | 15 | 15 | 14 | 10 | 10 | 10 | 10 | 10 | 10 |
| 留萌 | 37 | 41 | 39 | 37 | 40 | 30 | 24 | 24 | 24 | 24 | 20 | 15 | 16 | 16 | 16 | 16 | 15 | 15 |
| 留萌 | 5 | 8 | 8 | 8 | 8 | 7 | 7 | 7 | 7 | 8 | 8 | 8 | 8 | 8 | 8 | 8 | 8 | 8 |
| 地方法人都市圏 | 16 | 20 | 20 | 20 | 23 | 19 | 16 | 12 | 12 | 12 | 13 | 12 | 13 | 12 | 13 | 12 | 12 |
| 留萌 | 10 | 10 | 11 | 11 | 12 | 13 | 15 | 14 | 12 | 12 | 10 | 9 | 9 | 10 | 10 |
| 留萌 | 20 | 23 | 23 | 21 | 18 | 20 | 19 | 15 | 14 | 19 | 18 | 18 | 16 | 15 | 16 | 16 | 12 | 12 |
| 桧山 | 1 | 1 | 1 | 1 | 1 | 1 | 1 | 1 | 1 | 1 | 1 | 1 | 1 | 1 | 1 | 1 | 1 | 1 | 1 |
| 桧山 | 1 | 1 | 1 | 1 | 1 | 1 | 1 | 1 | 1 | 1 | 1 | 1 | 1 | 1 | 1 | 1 | 1 | 1 | 1 |
| 桧山 | 1 | 2 | 2 | 2 | 2 | 2 | 2 | 2 | 2 | 1 | 1 | 2 | 2 | 2 | 2 | 2 | 2 | 2 | 2 |
| 桧山 | 3 | 4 | 4 | 4 | 4 | 4 | 1 | 1 | 1 | 1 | 1 | 1 | 1 | 1 | 1 | 1 | 1 | 1 | 1 |
| 桧山 | 2 | 3 | 3 | 3 | 2 | 2 | 2 | 1 | 1 | 1 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 |
| 桧山 | 6 | 7 | 4 | 4 | 4 | 4 | 1 | 1 | 1 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 |
| 桧山 | 6 | 6 | 6 | 6 | 6 | 6 | 6 | 6 | 6 | 6 | 6 | 6 | 6 | 6 | 6 | 6 | 6 | 6 | 6 |
| 桧山 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 |

「学校基本調査」における専修学校関連データの推移に関する一考察
表 6 専修学校生徒数（計，男，女，女子比率）

<table>
<thead>
<tr>
<th>年度</th>
<th>地域</th>
<th>77</th>
<th>79</th>
<th>81</th>
<th>83</th>
<th>85</th>
<th>87</th>
<th>89</th>
<th>91</th>
<th>93</th>
<th>95</th>
<th>97</th>
<th>99</th>
<th>1</th>
<th>3</th>
<th>5</th>
<th>7</th>
<th>9</th>
<th>11</th>
<th>13</th>
<th>14</th>
</tr>
</thead>
<tbody>
<tr>
<td></td>
<td>富山</td>
<td>1592</td>
<td>1338</td>
<td>259</td>
<td>321</td>
<td>176</td>
<td>134</td>
<td>91</td>
<td>69</td>
<td>50</td>
<td>35</td>
<td>23</td>
<td>15</td>
<td>1</td>
<td>7</td>
<td>9</td>
<td>10</td>
<td>12</td>
<td>13</td>
<td>14</td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td></td>
<td>東北</td>
<td>571</td>
<td>1338</td>
<td>259</td>
<td>321</td>
<td>176</td>
<td>134</td>
<td>91</td>
<td>69</td>
<td>50</td>
<td>35</td>
<td>23</td>
<td>15</td>
<td>1</td>
<td>7</td>
<td>9</td>
<td>10</td>
<td>12</td>
<td>13</td>
<td>14</td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td></td>
<td>北海道</td>
<td>1510</td>
<td>1338</td>
<td>259</td>
<td>321</td>
<td>176</td>
<td>134</td>
<td>91</td>
<td>69</td>
<td>50</td>
<td>35</td>
<td>23</td>
<td>15</td>
<td>1</td>
<td>7</td>
<td>9</td>
<td>10</td>
<td>12</td>
<td>13</td>
<td>14</td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td></td>
<td>1236</td>
<td>1338</td>
<td>259</td>
<td>321</td>
<td>176</td>
<td>134</td>
<td>91</td>
<td>69</td>
<td>50</td>
<td>35</td>
<td>23</td>
<td>15</td>
<td>1</td>
<td>7</td>
<td>9</td>
<td>10</td>
<td>12</td>
<td>13</td>
<td>14</td>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td></td>
<td>石狩園</td>
<td>1510</td>
<td>1338</td>
<td>259</td>
<td>321</td>
<td>176</td>
<td>134</td>
<td>91</td>
<td>69</td>
<td>50</td>
<td>35</td>
<td>23</td>
<td>15</td>
<td>1</td>
<td>7</td>
<td>9</td>
<td>10</td>
<td>12</td>
<td>13</td>
<td>14</td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td></td>
<td>北海道</td>
<td>1510</td>
<td>1338</td>
<td>259</td>
<td>321</td>
<td>176</td>
<td>134</td>
<td>91</td>
<td>69</td>
<td>50</td>
<td>35</td>
<td>23</td>
<td>15</td>
<td>1</td>
<td>7</td>
<td>9</td>
<td>10</td>
<td>12</td>
<td>13</td>
<td>14</td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td></td>
<td>1236</td>
<td>1338</td>
<td>259</td>
<td>321</td>
<td>176</td>
<td>134</td>
<td>91</td>
<td>69</td>
<td>50</td>
<td>35</td>
<td>23</td>
<td>15</td>
<td>1</td>
<td>7</td>
<td>9</td>
<td>10</td>
<td>12</td>
<td>13</td>
<td>14</td>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td></td>
<td>北海道</td>
<td>1510</td>
<td>1338</td>
<td>259</td>
<td>321</td>
<td>176</td>
<td>134</td>
<td>91</td>
<td>69</td>
<td>50</td>
<td>35</td>
<td>23</td>
<td>15</td>
<td>1</td>
<td>7</td>
<td>9</td>
<td>10</td>
<td>12</td>
<td>13</td>
<td>14</td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td></td>
<td>1236</td>
<td>1338</td>
<td>259</td>
<td>321</td>
<td>176</td>
<td>134</td>
<td>91</td>
<td>69</td>
<td>50</td>
<td>35</td>
<td>23</td>
<td>15</td>
<td>1</td>
<td>7</td>
<td>9</td>
<td>10</td>
<td>12</td>
<td>13</td>
<td>14</td>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td></td>
<td>北海道</td>
<td>1510</td>
<td>1338</td>
<td>259</td>
<td>321</td>
<td>176</td>
<td>134</td>
<td>91</td>
<td>69</td>
<td>50</td>
<td>35</td>
<td>23</td>
<td>15</td>
<td>1</td>
<td>7</td>
<td>9</td>
<td>10</td>
<td>12</td>
<td>13</td>
<td>14</td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td></td>
<td>1236</td>
<td>1338</td>
<td>259</td>
<td>321</td>
<td>176</td>
<td>134</td>
<td>91</td>
<td>69</td>
<td>50</td>
<td>35</td>
<td>23</td>
<td>15</td>
<td>1</td>
<td>7</td>
<td>9</td>
<td>10</td>
<td>12</td>
<td>13</td>
<td>14</td>
<td></td>
<td></td>
</tr>
</tbody>
</table>

（単位：人，％）
生徒数の特徴を見ると全道的には1980年からピークの2004年に約2倍となっている。地方別の専修学校数の増減が生徒数の増減に与えた影響であるが、ピーク時に対して全道、石狩圏、地方都市圏の多くが20〜30%減少させているなかで、オホーツク（網走）地方、釧路地方が現状を維持もしくは増加傾向となっている。地方圏の多くが日高地方と桧山地方を除き完全に存続不可能な状況になっている。男女比でみると当初70%を超えていた女子の比率が徐々に低下し56.4%までに低下していることから、この間の増加に寄与したのは男性であったことがわかる。この動向を踏まえて地方別に特徴を見ていくと、専修学校制度発足当初は石狩地方を含むすべての地方で80%以上、80年代になっても石狩地方と胆振地方を除いて70%以上が女子によって占められていた。すなわち地方都市圏、地方圏にとって専修学校は「女子向き」の進学先、言いかえればローカルなトラッキングの不可欠な構成要素だったのである。しかし、生徒数のピーク時には地方都市圏で70%前後、石狩圏で50%近くになり、男子の比率が徐々に上昇していることがある。

表7 専修学校生徒数（上段）、教育訓練機関進学者数（下段）
（単位：人）

<table>
<thead>
<tr>
<th>年度</th>
<th>79</th>
<th>81</th>
<th>83</th>
<th>85</th>
<th>87</th>
<th>91</th>
<th>93</th>
<th>95</th>
<th>97</th>
<th>99</th>
<th>13</th>
<th>15</th>
<th>17</th>
<th>19</th>
</tr>
</thead>
<tbody>
<tr>
<td>全道</td>
<td>19777</td>
<td>21117</td>
<td>22346</td>
<td>22968</td>
<td>25041</td>
<td>28779</td>
<td>33462</td>
<td>36884</td>
<td>35469</td>
<td>37909</td>
<td>39046</td>
<td>38766</td>
<td>35635</td>
<td>32689</td>
</tr>
<tr>
<td>石狩</td>
<td>49348</td>
<td>11039</td>
<td>11198</td>
<td>12114</td>
<td>15093</td>
<td>17732</td>
<td>21911</td>
<td>24649</td>
<td>23765</td>
<td>26088</td>
<td>28437</td>
<td>28463</td>
<td>26084</td>
<td>23834</td>
</tr>
<tr>
<td>福井</td>
<td>3373</td>
<td>3477</td>
<td>4248</td>
<td>5312</td>
<td>7168</td>
<td>9400</td>
<td>11624</td>
<td>12409</td>
<td>12430</td>
<td>12537</td>
<td>14354</td>
<td>15854</td>
<td>17524</td>
<td>19704</td>
</tr>
</tbody>
</table>

「学校基本調査」における専修学校関連データの推移に関する一考察
また、石狩圏への集中率を見ると、80年代は50％程度であったが、徐々に上昇し90年代には60％を大きく上回るようになり、2002年からは70％を超えるようになる。なかでも男子の集中率は高く2004年時点では全道の男子のうち80％弱が石狩圏に集中していたのである（2014年では75.0％）。こうした傾向は表7からも見て取れる。石狩圏は進学者に対し在籍者が圧倒的に多いのである。それに対し地方都市圏は地元充足率が高い地方と低い地方に分かれる。空知、後志、オホーツク（網走）、十勝地方は進学者が在籍者を上回り、胆振、渡島、上川、釧路はその逆である。先に見たようにオホーツク、十勝の学校数が減少しなかったのは、こうした実を反映してのことであろう。後者では地元で一定数進学可能な様子が見て取れるのである。それに対し地方圏はすべて進学を期に地元から流出していることがわかる。

（3）進路・進路指導への影響
各地方における専修学校の存立状況やその変動は大学進学や就職の動向とあいまって、高校生の進路や高校における進路指導に大きな影響を与える。

石狩圏では大卒の好調な就職実績から、かなりの高校で進路指導を大学進学へシフトさせている。医療系をのぞき、専修学校への進学は大学進学を想定して得られない生徒に限られる（ある中学校の元進路指導部長）という。それに対し、地方都市圏では状況はすべていぶん異なる。表8は釧路市内の高校の進路状況をまとめたものである。6つの学校例の中にはトップの進学実績を示している学校は含まれていない。中堅校クラスではかつては40％台、2010年の実績でも30％台の進学率を示しているのである。医療、福祉、教育系を中心としたローカルトラックや石狩圏への進学が想定され、更に地方圏になるととりわけ就職状況に大きく左右されるが、進学の場合その多くが隣接する地方または石狩圏への専修学校が主な進学先となる。年度により傾向は大きく異なるようであるが、医療、福祉、教育に加え、理美容、調理等いわゆる「手に職系」の学科は近隣の地方都市、石狩圏への進学はネイル、ブライダル等それらよりも「見栄えのよい」学科が選択されることも多い（ある渡島管内の進路担当高校教員）ようである。

表8 釧路市内各校の進路状況

<table>
<thead>
<tr>
<th></th>
<th>大学進学</th>
<th>専修・専門学校進学</th>
<th>就職</th>
</tr>
</thead>
<tbody>
<tr>
<td>A高（普）</td>
<td>38.5</td>
<td>43.0</td>
<td>33.5</td>
</tr>
<tr>
<td>B高（普）</td>
<td>27.5</td>
<td>27.4</td>
<td>32.0</td>
</tr>
<tr>
<td>C高（普）</td>
<td>12.1</td>
<td>15.9</td>
<td>17.3</td>
</tr>
<tr>
<td>D高（普）</td>
<td>8.3</td>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>E高（専）</td>
<td>9.5</td>
<td>10.7</td>
<td>14.2</td>
</tr>
<tr>
<td>F高（専）</td>
<td>12.7</td>
<td>10.1</td>
<td></td>
</tr>
</tbody>
</table>

引用）2004年および2010年に関しては上原（2013）、2015年のデータは各校HPより。
まとめにかかえて

小論で明らかにしたことは、基本的には統計データに基づいて分析したものである。この範囲でも全国的な動向に対する北海道の特徴、さらに北海道内の地方（類型）ごとの特徴が一定程度明らかになったといえるだろう。中卒後の進路に関しては職業能力開発政策の影響を強く受けていたこと、高卒後の進路に関しては専修学校の存在感が全国に比して高いのが北海道の特徴であった。また、札幌を中心とする石狩圏とそれ以外の地方で状況は大きく異なっていた。前者の場合、全国以上に大きな変動の渦中にある。後者では、全国に比して専修学校の需要や社会的影響力が相対的に高いと考えてよさそうである。事例に即した検討は今後の課題となるが、医療・福祉系を中心にして専修学校は主要都市に現代においても一定の重みを持って存続し続け、地元と周辺から一定の生徒の受け入れ先となっているのである。また大きな男女差も確認した。地方都市では「女子向き」の進学先であったのに対し、かつては北海道全体の専修学校の男子生徒の80%が石狩圏で学んでいたのである。地方都市圏、地方圏の若者は専修学校での学びに何を求めているのか、今後明確にすべき大きな論点であろう。

〔付記〕
本稿はJSPS補助金（基盤（B）：課題番号：15H03466）による研究成果の一部である。

注
1 本稿が対象としているのは、あくまでも専修学校等のデータである。しかし、明らかに文脈上専門課程が対象である場合は、特にことわることなく専門学校と表記することがある。
2 空から述べていくと信頼を含む「渡島」、室蘭・苫小牧を含む「胆振」、小樽を含む「後志」、岩見沢を含む「空知」、旭川を含む「上川」、帯広を含む「十勝」、網走を含む「網走、オホーツク」、釧路を含む「釧路」である。なおこの分類には稚内を含む「宗谷」も入るが便宜上ここには含めない。
3 「桧山」、「日高」、「宗谷」、「留萌」、「根室」の諸地域である。
4 時期により異なるが、専修学校一般課程等には一般課程、各種学校、予備校、公共職業訓練機関（1999年に独立）等が含まれる。
5 例えば「人間」（1999）。
6 こうした研究の代表はなんと言っても植上（2011）であり、その特徴はいみじくも副題に表現されている。また、乾（2006）のなかでも専門学校に通う若者の実態が紹介されている。とはいえ、60年代から70年代にかけての各種学校時代、そこに通う生徒の実態の解明が目指された。その代表的なものが野間教育研究所（1972）である。他に原、草野、梅津（1975）がある。
7 たとえば「上原」（2013）。
8 それはまた未解明なまま「周縁化」されてきたということも可能であろう。なお本研究は（付記）でも述べたようにJSPS補助金（基盤（B））の一部であるが、そのテーマは「学校教育の“周縁”の現代的可能 性に関する複合的研究所」である。
9 地方進学校からの学歴取得とローカルトラックの構造の理解に関しては吉川（2001）（2014）がある。なお、吉川氏による事例分析と統計分析の間には専門学校の評価も含めて、若干矛盾があると思われるが、本格的な指摘は他稿を期したい。
この間の北海道の公共職業訓練に関する政策の展開は木村（2010）を参照されたい。なお、政策が先行したか実態が先行したか評価は難しいが、中卒後クラスに2名程度は「高校進学や就職とは異なる“進路”に進む生徒がいた」時代から、高校以外の受け皿がないという社会的イメージが定着した時代になったとの意義は相当に大きいように思う。この論点に関しては香川・児玉・相澤（2015）が参考になる。

なお、ここにはいわゆる「予備校」が含まれている。1999年からはいわゆる「前年度卒業者のうち大学等入学志願者」として「浪人数」が独立データとなるので、影響を排除することは容易であるが、それ以前に関してはかなり難しい。しかし、浪数を算出することは可能である。上記データから専修学校入学者を差し引いたデータが高校卒業後の進路者の進学者を近似的に示している。この数値は80年代に5％台から10％程度まで急拡大し、その後8～9％台と高止まりし、90年代後半に6％台にまで低下する。また、その数は99年以降の「前年度卒業者のうち大学等入学志願者」の数値とよく合致する。しかし、時期をさかのぼればさらにその相違は大きい。いわゆる「予備校」もすべてが種学校として認可を受けているわけではない。なお、予備校には大学受験以外のものも含まれていること、高校の回答数と専修学校の回答数の違いなどの理由から、それらの数値は99年以降の「前年度卒業者のうち大学等入学志願者」の数値とよく合致する。上述の予備校の動向の実感とよく合致することもまた事実である。より厳密な検討を待つべき。

胆振地方の独特の動きは80年代前半の日本工学院の開校の影響も大きい。

なお、石狩地方の就職率の低下は全国以上であり、年度によっては10％以下となっていることも注意すべきであろう。こうした動向が続いているならば、石狩圏の高校関係者が“高卒後直ちに就職する”という高卒就職主流には前であった事実に関心を持つことがますます困難となろう。

浅川（2009）。

更に指摘するならば、地方圏では年度による変動が比較的大きい。その原因については後述する。

なお、全国的には学校数のピークは1998年で3,573校、生徒数のピークは2004年の79,2054名である。男女比に関しては北海道とは異なり1980年時点の女子比率は66.5％で北海道ほど高くはなく、90年代前半にはほぼ同数である。その後やや男子比率は下がるが、6％程度の相違である。

植上も同様の事実を指摘している。

この教員によればオープンキャンパスのあり方などを含め、検討課題は多くあるようである。

参考文献
浅川和幸『北海道の現状』労働政策研究報告書No.108『地方の若者の就業行動と移行過程』第1章所収、2009年。
乾彰夫編『18歳の今を生きぬく』青木書店、2006年。
植上一希『専門学校の教育とキャリア形成』大月書店、2011年。
上原慎一『鉄道地方の雇用・労働市場と人材育成』産業教育学会編『産業教育学ハンドブック』大学教育出版、2013年。
同『養成工制度』日本産業教育学会編『産業教育・職業教育学ハンドブック』大学教育出版、2013年、第5章所収。
香川・児玉・相澤『＜高卒当然社会＞の戦後史』新曜社、2014年。
木村保茂『公共職業訓練の今日的特徴と課題』北海学園大学開発研究所「開発論集」第85号、2010年。
韓民『現代日本の専門学校』玉川大学出版部、1996年。
倉内・神山・関口『各種学校生徒の意識調査』野間教育研究所『野間教育研究所紀要』第28集、1972年。
原・草野・梅津「高校専修教育改革に関する若干の提言」日本教育学会大会研究発表要項34, 1975年
吉川徹『学歴社会のローカルトラック』世界思想社, 2001年。
同 「それぞれの地元の唯一の解」菅谷剛彦編著『「地元」の文化力』河出ブックス, 2014年。
The trend of the amount who goes the vocational training school, miscellaneous school, and others in Hokkaido prefectures

Shin-ichi UEHARA

Key Words
vocational training school, specialized training college, location of professional training college, disparity in Hokkaido prefecture

Abstract
The aim of this article is to consider of the amount about the young people who choice the “various course” based on survey. In Japan, it is well known the amount of young people’s course based on “School Basic Survey”. But this survey make clear the amount of people who goes the school of higher grade or who get a job. Moreover, the definition of the “school of higher grade” is very rigid. It is limited the schools which are based on School Education Act First article (it is called “ichijo koh” in Japanese). In the same way, the definition of who get a job is limited permanent employee (it is called “seisyain” in Japanese). Various schools such as specialized college, vocational training schools, schools that established by companies or trade association and who get atypical employment had been excluded (resent, professional college and who get atypical employment has been made clear).

This paper tries the amount who goes various courses young people, especially special training college and so on with the variation in Hokkaido prefecture.